

# 僕の部屋がダンジョンの 休憩所になってしまった件

東国不動  
イラスト  
JUNA



試し読み版

# 1 訳あり物件はダンジョンとつながっていた件

「2LDKで月3万円……ひよっとして……この部屋……幽霊とか出るんじゃないですか？  
ははは」

「幽霊」という非現実的な言葉を出すのが、僕は少しだけ恥ずかしかったので冗談めかした。  
もっともコミュ障なので、うまく冗談めかせているか自信はない。

それでも不動産屋は冗談と受け取ってくれたようだ。

「ははは、お客さん、冗談はやめてくださいよ。幽霊なんて出るわけじゃないじゃないですか」  
そうだ。何も心配いらぬ。マンションやアパートなどの賃貸物件で事故があった場合は、  
入居者にそれを告知しなければならぬ法律があるとか聞いたような気がする。

スーツ姿なのに胡散臭さを漂わせる不動産屋であっても、ここが日本である以上、法律によ  
って罰則を受ける可能性があれば、おいそれと嘘はつかないだろう。

「ですよねえ。ははは」

「ボソ（まあゴブリンとかスライムが出るって話だけだな）」

ちよっと待て。聞き逃さなかつたぞ。

この男、僕の愛想笑いに合わせて、ごく小さい声だが間違いないおかしなことを言った。

「あの……何か言いました？」

「じゃあ、この契約書のここに名前を大きく書いてください。ここにはハンコをポンッと押し  
てくださいね〜」

明らかにヤバイ予感がする。

ゴブリン？ スライム？ 僕が好きなゲームやラノベに出てくるモンスターの名前か？

ヤバイッ、ヤバイッ、ヤバイ！ 僕の第六感がそう告げている。

だが、東京都下で1階とはいえ、都内の2LDKのマンションの家賃が月3万円という魅力  
には抗<sup>あが</sup>えない。

そう、僕はとある事情から大学を中退した、悲しいバイト戦士なのだ。家賃は安ければ安い  
ほどいい。

チラッと目の前の男を見た。

現実感アリアリの殺風景な事務所にいるヤクザ風スーツ男の口からゴブリンなんて言葉が出  
てくるわけがない。

そう思っていた時期が僕にもありました。

僕は契約書にハンコをポンッと押し名前を書いってしまった。

ススキヤ  
鈴木透と。



「おーけー。そういうことね」

マンションの玄関から出ると廊下が「ダンジョン」になっているってわけだ。  
何でダンジョンってわかるかって？

「玄関のドアを開けたら真っ暗だったからスマホの懐中電灯機能を使って照らしたら、廊下が自然岩の石張りになっているって……ダンジョンじゃんよ！」

完全に事故物件だよ。というか事故物件ってレベルじゃない。

いやいや、ちょっと待て。何かの間違いかもしれない。冷静に思い返してみよう。

昼頃にあの胡散臭い不動産屋とマンションに来た。鍵を渡されて……。

「あっ、そういうやアイツ逃げるように帰っていったぞ！」

やっぱり不動産屋は知っていたんだ。

そして後から来た引越しの業者さんが荷物を運び入れて帰ってからは、僕はずっと一人で荷ほどきや整理をしていた。

お腹も減ってきて夜になったから、夕食を買いにコンビニに行こうとした。

——で、玄関から外に出ようとしたら、廊下がダンジョンになっていた。

結局、落ち着いても結論は何も変わらなかった。

どろりて契約を急がせるわけだ。

一度、誰かが住んだ後は事故物件であることを告知しなくていいとか聞いたことがあるしな。あの胡散臭い不動産屋は、ゴブリンとボソツとつぶやいて告知したつもりなんだろう。

「つかコレ生きて帰れるんだろうか。あ……生きて帰れるかって、考えたらここがもう僕の家じゃなか……」

僕は静かに玄関のドアを閉めて鍵を回した。

玄関のドアは頑丈そうだ。

暴漢には有効に作用すると思う。

「暴漢には有効でもゴブリンやスライム、あ、あるいは……ドラゴンにはどうなんだろう……」

マンシヨンの廊下ならぬ、ダンジョンの廊下の左右も先ほど確認したが、パッと見たところ

ゴプリンもスライムも近くにはいなかった。

しかし曲がり角の向こうには、ゴプリンどころかドラゴンがいたっておかしくない雰囲気の世界だった。

安心は全くできそうにない。

2LDKのリビング兼ダイニングに置いてある椅子に座って頭を抱え込んだ。

そういえば、ドタバタしていて夕方から部屋の電気をつけることも忘れていた。

真っ暗な部屋に窓から街灯の明かりが降り注ぐ――。

「街灯の明かり!？」

頭を上げて窓の外を見ると……電柱に街灯と、まぎれもなく日本の光景だった。

「どーなっているの？ まさか!」

僕は玄関から靴を取ってきて、オタクグッズ置き場にしようとしていた和室の大きな窓から外に出てみた。

都市特有の素晴らしい排ガスの匂いがした。

ビルの明かりに街灯の明かり、車のライト、すぐ先にはコンビニと総合ディスカウントストアのトンスキホーテの明かりが夜空の星々の光を圧殺している。

暗闇に支配された石張りの通路の世界とは似ても似つかなかった。

「普通の日本……立川市の街中だ……。このマンションはどうなっているんだ？」

もう1回、先ほど外に出た窓からマンションの和室に戻る。普通に戻れた。

「ひよっとして、玄関から出るとあのダンジョンにつながるのか？　ってことは何だ？　つまり……」

窓から出入りするだけのデメリットで、都内の2LDKのマンションが月3万円ってことなのか。

事故物件どころかい物件かもしれないぞ。

つうか、むしろダンジョンとか楽しそうじゃね？

ダンジョン探索とか男のロマンだろ。

自分で自分の冷静さに驚いていた。

「僕が冷静になれるのも、ゲームとかラノベに浸りすぎたせいかな。あのヤクザなら……本当は不動産屋だけど、きつとシオンベンちびって1日もあんな部屋にはいられないよ。くつくく」

僕はルンルン気分でコンビニとトンスキホーテに向かった。

## 2 ダンジョンに倒れていた女騎士をお持ち帰りしてしまった件

ゲームたるもの、ダンジョンを探索する理由は『そこにダンジョンがあるから』だろう。そこまで格好つけなくても、ゲームの世界にしかないダンジョンだぞ。

やっぱり無理だ、また引越そう、となるかもしれないけど、その前に少しぐらい冒険しておきたい。

「それにしても総合デイスカウントストアというだけあって、トンスキホーテはすごいなあ。まさかヘッドライト付きヘルメットに登山用のピッケルまで売られているとは……」

もちろんトンスキホーテには鉄の鎧よろいのような防具こそないが、ダンジョン探索用のライトと武器としては、どちらも最高なのではないだろうか。

特にこのヘッドライト付きヘルメットは、松明たいまつやランタンで冒険している世界だったら、伝説のアイテムレベルかもしれない。

コンビニとトンスキホーテでさまざまな食料とアイテムを買い込んで、マンションに戻ってきた。

一息ついてから玄関の扉を見る。

「行くか……ダンジョンに！」

まずは玄関のドアに耳を当てて、おかしい音がしないか確認する。

「とりあえず、ドアを開けたらすぐにゴブリンが襲ってくるということはなさそうだ。スライムは……音するのかね……？」

僕は玄関のドアをそっと開けた。

ヘッドライトが暗闇を照らす。

スマホの懐中電灯機能とは段違いの光量だ。

「あれ？ 通路かと思っていたけど違ったみたいだ」

どうやら部屋のドアの前に大きな柱があって、その向こうにはさらに大きな空間というか部屋があるようだ。

もし縦横が同じ大きさなら、広さは25mプールぐらいだろうか。

柱を通路の壁と違ってしまったらしい。

「まさか柱の死角の向こうから急にゴブリンさんこんにちは、にならないだろうか」

玄関のドア越しではなく、今度はじかにダンジョンの空気から音を聞こうと必死になる。

「……………」

大軍ではないと思う。思うけど……柱の向こうの奥から息遣いらしき音が聞こえるやんけ……。

「ゴ、ゴブリンか」

僕は今、体の半分だけ玄関、半分だけダンジョンという状態だ。

ゴブリンを目視するためには、完全に玄関から出て柱の影から顔を出さないといけない。

「いたしてもたぶん1匹。それに本当にいたら走って玄関に戻ればいい。よし行くぞ！」

ああ、よせばいいのに。あの不動産屋なら絶対にやらない。

僕はゲームのやり過ぎなんだろうなと思いつつ、ダンジョンに足を踏み出した。

玄関の扉が消えるということもない。

逃げ道を確保しつつ慎重に歩を進め、柱の陰から部屋の奥のかすかな音を立てている方を覗いた。

「ひっ！ いた！ ゴブリン！」

無機質な岩肌の壁と床に、明らかに有機的な肉体が横たわっていた。

僕はすぐに柱の陰に引込む。

めっちゃ驚いた。驚いたが……。

「どうやら弱っているゴブリンかもしれないぞ」

そのゴブリンは牙をむき出しにするでもなく、こちらの光の方を見るでもなく、ただ横たわっているだけだった。

何かが倒れていることに驚いたけど、最初に息遣いらしき音を聞いた時よりも恐怖は少なくなかった。

畏の可能性もあるが、見た瞬間、直感で弱々しさを感ずるのだ。

どうする。もう一度確認するか。

「ここまで来たんだ。するしかないよな」

慎重に柱の陰からゴブリンを覗く。

先ほどよりはだいぶ長い時間ゴブリンを観察して、ゆっくりと柱の陰に戻った。

「つうか……あれ……ゴブリンか……?」

有機物に感じた物体はゴブリンの太ももだったらしい。肌色が妙に艶めかしかつた。

よく見れば、上半身は鎧を着ていて、近くには盾が転がっていた。

そしてライトに照らされると、黄金のように美しく反射する金髪が石床に散っていた。

「ゴブリンじゃなくて……人間の女性っぽいぞ……しかも、ひよっとしてゲームでよくいる

……お、女騎士なんじゃないだろうか?」

遠目での確認だが、やはり大きな柱のずっと向こうの暗がりに倒れているのは、ゴブリンで

はなく女騎士に思える。

「女戦士」ではなく「女騎士」と判断したのは、太ももを開けさせてい<sup>はだ</sup>てもどこか気品を感じさせたからだ。

どこかの英雄召喚の物語に出てくるような美しい女騎士。少なくともその可能性がありそうだ。

胸の鼓動の中に緊張感ではない高揚感が混じる。

しかし、本当にゴブリンではないといえるのだろうか。

怪しいところがないといえば、嘘になる。

ひよつとしてあの女騎士は釣り餌なのではないか。

それ以前に状況のすべてが怪しい。だが。

「普通、人はこんな冷たい石床には寝ない。本当にあれが人間なら、すなわち危機であるということだ」

助けなくてはならない。

死んだおばあちゃんに、人には親切にしろと言われている。

女性、しかも死にそうになっている……かもしれない女騎士さんならなおさらだ。

「ここで勇気を出さなきゃいつ出す。日本の村人Aだつてやるときゃやるんだよ！」

そう自分に言い聞かせてピッケルを持つ手に力を入れる。何の音も聞き漏らすまいと恐る恐る進む。

足を踏み出す前に床をピッケルで何度も叩く。

柱から顔を出して周囲を確認。柱の死角にもゴブリンはなし。

女騎士さんは全く動かないが、かすかに嗚咽おえつを漏らしている……ように聞こえる。ゴクリという音が喉からして、自分が唾を飲んだことに気が付く。

どういうことだ？ 女騎士さんは石床に横になりながら泣いているのか？ 強力なヘッドライトで何度も照らしているのだ。

こちらに顔を向けてもいいんじゃないか？

畏なのか、それとも危険が近くにあるのか？

先ほどの高揚感はすべて吹っ飛び、極度の緊張感に支配される。

しかし、もし危険が迫っているなら早く助けないと命に関わるかもしれない。

僕はついに大部屋の柱の陰から足を一步踏み出す。

もちろん一番気になるのは女騎士さんだが、それだけに意識をとられてもいけない。

壁、天井、床、ありとあらゆるものをヘッドライトで照らして確認しながら慎重に進む。

胡散臭い不動産屋の事務所に入った時の100倍は緊張している。

かなり女騎士さんに近づいた。もうゴブリンと見間違えることはない。確実に女騎士さんだ。変装の可能性も極めて低い……と思う。

おそろくとても美しいだろう顔も見えつつある。

だが先ほどから段々と大きくなってきてきている音は、ハッキリと女騎士さんの鳴咽とわかった。「ひっく、ぐす……」

なぜ泣いているんだろうか。しかも、やはりこちらを見ないで上を向いたままだ。

大部屋を隅々まで照らせるようになったヘッドライトが、この部屋には女騎士さん以外に誰もいないことを教えている。

だが女騎士さんの数歩先には部屋の向こう端の石壁があつて、頑丈そうな鉄の扉とスイッチのような石のボタンがある。

やはり釣り餌なのだろうか？

あそこから大量のコブリンが出てくるのか？

慎重に慎重に。今までの僕の人生の中で最も慎重に行動しなければ、即デッド・エンドだ。

僕は声をかける前に小さな石を拾って女騎士さんに投げてみた。

意外にも一発で鎧に命中。

「ひっ、ひっ。やめて」

え？ 日本語？

いや違う。日本語ではない。

英語ですらない謎の言葉なのだが、僕の耳には日本語のように……というか意味が通じて聞こえた。

ますます畏である気もしたが、同時に目の前にいる女性の怯え様は真に迫っていて、演技とは思えなくなってきた。

勇気を出して声をかけてみることにした。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

「こ、来ないで！」

「だ、大丈夫かどうか言ってくれないと、日本語と変な言語で意味が通じてるかわかんないです」

「い、いいから来ないで！ お願い！」

僕は幾分、冷静になった。少なからず情報を得ることができたからだ。

とりあえず日本語と女騎士さんの聞いたこともない言語で意思疎通はできること。

女騎士さんは動けないでいるようだということ。

「い、今からそっちに行きますよ」

「こ、来ないでって言ってるじゃない！」

「だってアナタ動けないでしょう？」

「動ける！ 動けるわ！」

「いや動けてないし……」

どう見ても演技には見えない。もし演技だとしたらこの女騎士さんは女優だ。

まあ遠目から見ても女優並みにお美しいお顔をなさっているが。

いや女優よりも美しいかもしれない。

来ないでという叫びを無視して、慎重に歩を進める。

「今、助けます」

「や、やめて、犯さないで、殺さないで」

は、はい？ 今この女騎士さん、何かおかしな事を言ったぞ。

もう女騎士さんは数歩の距離だ。

「今、何て言いました？」

「お、お掃除とかお洗濯とか何でもしますからっ！ 殺さないでっ！ ゴ布林様っ！」

「ゴ、ゴ布林!?!」

わかった。どうやら僕と女騎士さんは、この真っ暗なダンジョンの中でお互いにお互いの存





「彼女、相当怯えていたのに……やっちゃった……でも生きてはいるみたいだぞ」  
調べたところ外傷もないようだ。

鎧の鉄板越しからでもわかる豊かな胸の鼓動……もとい脈拍も正常っぽいし、息もしている。  
「なら、どうして？ あっ……」

僕はあることに気が付いた。

彼女の股間のあたりから、ヘッドライトの光を黄金色に反射させる液体が流れ出ていることを。

身体的な危険シグナルか、気を失うほどの恐怖によるものかわからないが……。

「ここに置いたら危険かもしれないし、何よりきつと恥ずかしいよね」

ダンジョンには救急車も来てくれないだろう。

僕は彼女をある安全地帯に運ぶことにした。

そう、僕の新居であるマンションの部屋だ。

ピッケルをベルトに差して彼女を背負うことにした。

「女騎士さんの両腕を僕の首に回して……ふ、太ももを担いでよっこいせ。お、重い！ 盾は  
とても運べないから置いていくしかないな」

僕は彼女の太ももをしっかりと握って、ヨロヨロと自分の部屋に戻っていった。

最初は最高の触り心地だと思ったが、黄金色の水で持ちにくくつてしょうがない。その上、僕の服までびしょびしょに濡れてしまった。

「ぐおおお！ はあっはあっ！」

何とか女騎士さんを玄関まで運びきり、後ろ手でドアの鍵を閉めた。

U字ロックも閉めたいところだが、まずは女騎士さんを寝かせないととても無理だ。

2LDKには自慢のリビングの他に2部屋ある。

洋室と和室だ。

「問題はどちらの部屋に女騎士さんを寝かせるかだが……」

和室はオタクグッズ置き場。そして新たに現実世界に出るための窓がある。

洋室は寝室にする予定だ。組み立て式のベッドとマットレスも届いてはいる。

「オタクグッズは真っ先に開けてしまっているから和室は使いたくないんだが、今からベッドを組み立てるのは不可能だ。和室の畳に寝かすしかないか……」

騎士さんを畳に寝かしてベッドシートをかけてあげる。

「緊張と肉体労働で疲れきったよ……」

玄関のドアに耳を当てて物音がしないことを確認した後、U字ロックも閉めた。

これからどうするか……。決まっている。

「和室に戻るか」

案外、和室に戻ったら騎士さんは煙のように消えていて、すべてが夢だと思えるかもしれない。

もちろん消えていなかった……。

女騎士さんは寝かせたままの姿勢で気を失っていた。

救急車を呼んであげようかとも思ったが、何て説明していいかわからないし、救急隊がダンジョンに巻き込まれる恐れもある。

それに彼女の容体も悪化しているようには見えなかった。

胸の上下運動……もとい呼吸も荒いようには見えない。

「鎧や濡れた服を脱がしてあげたいけど、それはセクシャルハラスメントになるだろうか。それにしても……」

美しい。しかも気品がある。

まるで整った人形のような顔だ。

これでまぶたを開けたらどうなってしまうんだろうか。

「けど引越すと極度の緊張と肉体労働の疲労で眠く……」

畳の上で女騎士さんを見ていたら眠くなってしまった。

続きは書籍版にてお楽しみください



『僕がダンジョンの休憩所になってしまった件』

書籍情報はこちら

[http://books.tugikuru.jp/detail\\_bokudan.html](http://books.tugikuru.jp/detail_bokudan.html)